京都の空襲と原爆投下問題

3 月 12 日に開催された「京都市の都市政策のあり方を問う」シンポジウムで、広原盛明・京都府立大学元学長の講演に次のような指摘があった。太平洋戦争では米軍爆撃の標的とされていたが、原爆投下目標第 1 号だったため「バージンターゲット」（原爆投下の効果を検証するため）として温存され、歴史的建造物や町並みが焼失を免れた。

この指摘が気になっていたが、久津間保治『京都空襲』（かもがわ出版、1996 年）に表題について書かれていたので抜粋して紹介。

京都はなぜ本格的な空襲を免れたのであろうか。この問題に関して、日本人の間に長い間、ある定説が流布していた。それは〈ウォーナー伝説〉といわれるものである。ウォーナーとは、日本の古代美術を研究するランドン・ウォーナー博士のことであり、第 2 次大戦当時、ハーバード大学附属フォッグ美術館の東洋部長をつとめていた人物である。このウォーナー博士が戦時中、京都・奈良の文化財を守るために、アメリカ政府・軍部に働きかけて両都市への爆撃を回避させたというのがこの〈伝説〉の内容であった。京都・奈良を爆撃から救った恩人がウォーナー博士であるとする〈ウォーナー伝説〉は、今では事実無根のつくり話であったことが判明している。

実は、京都に本格的な空襲がなかったのは、京都が原爆投下の候補地になっていた事実と関連があるのである。京都は、人口の多さ、盆地という地形、その破壊が日本人に与える衝撃の大きさ等の故に、一貫して原爆投下の第一目標に指定されていた。京都以外に原爆投下目標に指定された都市には広島・小倉・新潟・長崎があるが、これらの都市もまた京都と同様、通常の本格的な爆撃をこうむっていない。これは、原爆投下目標の候補となった都市には、通常の爆撃が禁止されていたからである。

なぜなら、人類史上最初の核兵器を使用するにあたって、アメリカはその威力を正確に測定する必要があった。国際社会でその威力を誇示するためにも、その測定は必要であった。ところが、通常の爆撃で既に破壊された都市の場合、その被害が通常の爆撃によるものか原爆によるものかの区別がつかず、正確な測定が不可能になるからである。こうして、原爆投下目標の候補地に指定された都市は、原爆投下用に「予約」されることとなった。つまり、それ以後、一切の通常爆撃が禁止されたのである。

京都に関して爆撃禁止命令が出された例は、原爆投下用の「予約」としての措置以外には存在しない。その文化財ゆえに、文化都市ゆえに爆撃を禁止した指令は存在しないのである。これが、米軍の極秘文書が示す真実である。

私も長い間、「伝説」を信じてきた。原爆の恐ろしさをあらためて考えさせられた。

（2023 年 5 月 23 日）